検証・浦和電車区事件の真実 No. 6

民主化闘争情報 号外］ 2008 年 4 月 14 日 発行 日本鉄道労働組合連合会（JR連合）

第 6回 エスカレートする追及行動

浦和電車区分会の決定など知るはずもないＹ氏（当該事件被害者）は、2000 年 12 月 30 日の職場集会で理不尽な要求を受け入れたことで、事が治まったと思っていた。ところが、年が明け、ＪＲ東労組による追及は治まるどころか、ますますエスカレートしていった。

３日間６回の追及集会で罵声を浴び続ける！

１月４日から６日までの３日間、午前・午後合わせて６回にわたり、浦和電車区３階の講習室でＹ氏に謝罪させるための臨時職場集会が開かれた。この集会には毎回 20～30 人の組合員が参加し、Ｙ氏一人に対し、「おまえの今までやってきたことは何なんだ！」「裏切り者！」「謝れ！」「バカ野郎！」などと口々に下品な罵声を浴びせ続けた。自ら発言しない者には役員が発言を促し、ほとんどの組合員がＹ氏を非難するという異様なものだった。Ｙ氏を見せしめにし、加勢しなければその場に居られないような雰囲気だった。Ｙ氏は屈辱的にも、６回にわたり繰り返し謝罪させられ、「今後は組合の方針に従う」ことを約束させられた。６回の集会には、上原分会長、山田被告が毎回のように出席していたほか、大澗・八ツ田・小黒・齋藤被告、大宮地本副委員長の梁次被告も出席していた。

運転の合間の執拗な追及で精根尽き果てる

ところで、Ｙ氏は１月４日は夕方から乗務する泊まり勤務で、５日昼前に勤務が終了した。６日も夕方からの泊まり勤務だった。つまり、４日の午前・午後の集会で追及された後に列車を運転し、翌５日の勤務終了後にも、直ちに午前・午後の集会で追及され、６日も午前・午後の集会で追及された後に、翌日まで列車を運転するという状態だった。そのような中で、京浜東北線で何千人ものお客様の乗車する列車を連日運転していた。

もちろんＹ氏はこのような糾弾集会に出席したいはずもなかったが、欠席すればもっとひどい仕打ちに遭うと思い、吊し上げを覚悟しながら、仕方なく参加したのである。泊まり勤務の合間に、３日間連続６回、しかも長時間にわたり職場の仲間から繰り返し罵声を浴びて追及され、Ｙ氏は精根尽き果ててしまった。Ｙ氏は、これからもこのような追及が続けば、事故を起こしかねず、安全が確保できるのかも不安で、目の前が真っ暗になった。

同じ運転士である分会役員らが、Ｙ氏がどのような状態で運転していたか、知らないはずはなかったはずである。（次号に続く）

［Ｙ氏の 2001 年 1 月 4 日～7 日の糾弾集会と勤務］

1 月 4 日			5 日			6 日			7 日
午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前
集会①	集会②	乗務（泊勤務）		集会③	集会④ （帰宅）	集会⑤	集会⑥	乗務（泊勤務）	